

第三章 古淨瑠璃全盛時代（萬治—寛文—天和）

緒言

前に述べたやうに、寛永から承應を経て漸次隆盛の機運に向つた淨瑠璃劇は、萬治から寛文を経て延寶天和に至る約三十年間に於て驚くべき盛況を呈する事となる。今この期間を淨瑠璃史上、古淨瑠璃の全盛時代と呼ぶ事としよう。この年代は東西を通じて淨瑠璃語りの名手が輩出して、各流派を立てて技を爭ひ巧を盡したこと、自然、曲節の進歩の著しかつたこと、淨瑠璃正本の刊行の盛況を呈したこと、人形の遣ひ方の進歩したこと、劇場外形の整つたこと、上演された作品の詩材の多方面に互り、脚色の多種多様になつたこと、觀客の愛好はいよいよその熱を高めるに至つたこと等の諸點に於て、半世紀足らずの年月とはいへない程の進歩發展を示し、江戸時代初期の人形劇は、實にここにその極致を示したかの觀がある。然るに翻つて見る

に、後世に於ては姉妹藝術も嘗ならざる密接の關係に立つて居る歌舞伎劇の狀況如何といふに、これは又その進度は實に遅々たるものであつて、寛永六年に女歌舞伎が禁止されて、大振袖の美少年の活動する若衆歌舞伎となり、三度變じて承應年中に野郎歌舞伎となるに及んで、漸く歌舞と容色とを主とする時代を過ぎて、眞面目に劇の創作實演が問題とされる時代となつた。併し戯曲の發達は、一方に於て作者の技倆に俟たねばならぬのであるが、無文な役者の兼業に過ぎなかつた此の時代に於ては、發達を望み得ないのは當然の事であつた。されば、寛文四年に大阪で福井彌五左衛門が『非人敵討』の二番續を脚色したとか、同年に江戸で南傳内が『今川忍び車』といふ二番續を脚色したとかいふことが、大事件として記録に止まつてゐるに過ぎない状態で、これを藝術的・文學的に見ては、頗る原始的領域を脱し得なかつたのである。

然るに新時代に於て、人形劇にあつては既にその詞章である淨瑠璃は頗る複雑にして整然たる脚色を有する作品が、年々何十篇となく新作された。そしてこれが立派な人形劇として舞臺上に演ぜられて成功し、而して歌舞伎の流行發達に對して、刺戟を與へ影響を及ぼした事は頗る注目すべきであると思ふ。劇は空想と自由奔放なる脚色との可能を條件とする世界に、迅速に發達するものではなからうかとの推斷は、我が國に於けるこの時代の件の狀態から見ては、

しかし考へられるやうに思ふ。それは兎に角、我が近世の演劇史に於ては、人形劇の方が歌舞伎劇よりは一步先んじて踏出し、歌舞伎を刺戟し、又これに影響を與へて行つたことは事實がこれを示して居る。

而してこの盛況については、三都を比較して見るに、江戸と京都とは實にこの期間がその隆盛の頂點であつて、この兩都は共に次の元祿期には歌舞伎の榮える舞臺となり、人形劇の中心は大阪に移るのである。而して大阪の元祿期の義太夫劇が實は人形劇としての發達の最頂點を示し、また我が戲曲史上の黄金時代といふべきであるが、これが爲にその準備の時代となつた今期は、淨瑠璃史・戲曲史上頗る重要な時代である。

第一節 江戸の盛況

明暦三年の大火が動機となつて、寛文元年十二月に、芝居興行は堺町・葺屋町・木挽町五丁目以外に於ては差許されないといふ布告があつた。

十二月廿三日、江戸町能。

諸見物芝居仕候者堺町葺屋町木挽町五丁目此處にて可仕候自今以後他處にて堅く仕る間敷事

その前後からして歌舞伎の四大劇場（猿蓑、市村、森田、山村）を始め、操芝居カラクリ見世物座及び土人形、子供手踊座等がすべてこの三町内に建設される事になつた。その中、操芝居の建設の模様を見るに、先づ寛文五年七月結城孫三郎が葺屋町に櫓を上げて看板に天下一と記し、十一年に野呂松勘兵衛願主で、和泉太夫は堺町に於て操芝居を興行し、江戸孫三郎も同年に堺町で興行する（（戯場年表））といふやうな有様で、堺町・葺屋町は歌舞伎や操の劇場が軒を並べてその繁昌は甚しかつた。この頃の古畫を見るに、劇場はすべて木造の立派な建物で、入口は鼠木戸もあるが、多くは三尺餘の巾となり、そこには客引が臺の上に立つて見物と呼び、その傍に札

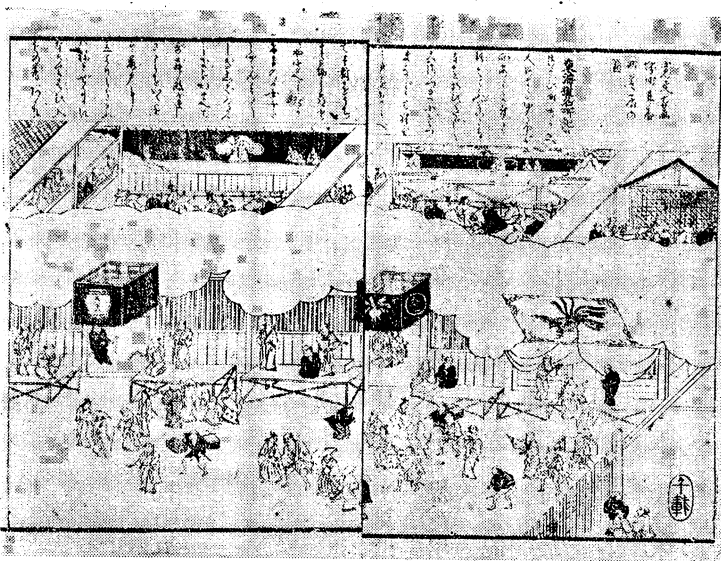
賣場があり、見物席には立派な棧敷が設けられて居る等、小屋掛・鼠木戸・土間の體であつた寛永期の模様比して全く面目を一新した觀がある。又その人形の種類も多くなり、立役・道化・女方等の遣ひ手がそれぞれ専門的になつて、自然腕前も進歩した。その劇場前に描かれた群集を見ればその繁昌の様も思ひやられる。

今この時代の主要なる流派について概説する。

一 和泉太夫（櫻井丹後少掾）

——金平節

江戸淨瑠璃の開祖とまで言はれた薩摩淨雲



寛文古畫町堀町葺屋芝居の圖（『聲曲纂集』所載）

には多くの門弟があつたが、就中和泉太夫と虎屋源太夫とが名高い。而して源太夫は京都に上つて活動するが、和泉太夫は江戸に止つて名聲を上げた。和泉太夫は既に明暦の頃から活動して居たことは、現存の正本によつて之を證し得られるが、寛文六七年頃受領して櫻井丹波少掾平正信と稱へた。葺屋町に住んで堺町に於て操芝居を興行し、その子長太夫と門人源太夫とがワキを勤め、人形遣には野呂松勘兵衛・鎌齋佐兵衛といふ名手があつた（雲錦隨筆
聲曲類集）。

〔註〕 野呂松は頭の平めにして顔の青黒く賤しげなる人形を遣つて、主として滑稽な役を演じながら、これを野呂ま人形といひ、轉じて愚かにして鈍ま人をのろまと呼ぶに至つた。一人遣の古風な人形で、佐渡の文彌節の人形などは近年まで野呂松人形と稱へた。鎌齋佐兵衛は賢き方の人形を遣つた（『聲曲類集』その他）。

『關東血氣物語』によれば、丹波少掾は生來力量勝れ武勇を好み、商工を以て一生を終るを潔しとせずして淨瑠璃太夫となつたのであるといふ。そのわけは、當時有名な淨瑠璃太夫は受領すれば貴人の前でも淨瑠璃を語れるといふ名譽を擔ふ事が出来るので、功名心の強かつた彼はそれを望んだのであるといふ。而して武を好む彼の天性はその藝の上にも反映されて、語物も極端なる武勇物が多く、殊に坂田金時の子金平（又、公平）といふ豪勇無比で超人間的の活動をする人物を主人公とした脚色の淨瑠璃を新作し、二尺許の鐵の棒で拍子を取り、毎日岩を叩き

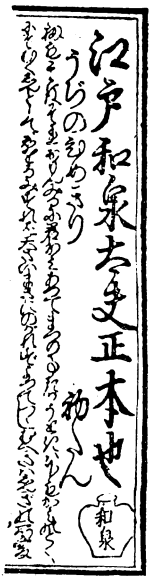
（註）人形の首を抜いたりして、道具や人形の損するは厭はずに勇氣凛々と語つたといふ。

（註）親丹波毎日岩を打碎き（享保十一年撰、『代々の蠶』）

元祖團十郎の荒事は、この太夫の藝風に刺戟されて生れたものであると言はれる。この豪快激越な藝は、殺伐の氣風がまだ残つて居り、また歌舞伎者（旗本の中の無頼の徒）が横行し、町奴が之に對抗して居た當代の江戸に於ては非常に歓迎された。彼等は自己の姿を和泉太夫の人形座に於て見出したやうな氣にさへなつた。それと共に一方に於ては、將軍家の遠祖たる源氏の活動と、源氏の繁榮とを大げさに謳歌したこの淨瑠璃は、將軍家のお膝下の町人共には、一種の自負的の好感を以て迎へられたといふ理由もあつたかと思はれるが、非常に歓迎されて、一時は公平節は江戸の藝壇を風靡し、ひいて上方に迄も大いなる影響を及ぼし、公平の亞流、公平まがひの淨瑠璃や公平もどきの人間が一時三都に幅を利かした程の有様であつた。

扱てこの丹波少掾の語つた公平淨瑠璃の作者は、岡清兵衛であつたと古來傳へられて居る。『故郷歸江戸咄』に、次のやうに見えてゐる。

扱又和泉太夫が淨瑠璃は岡清兵衛といふ者作る。いづどの程にか金時が子を金平なりといひ廣め、渡邊の綱が子を武綱と言ひはやらかしてより、昔語に言ひ傳へたる辨慶、時致、朝比奈などは彼金平が片手にも



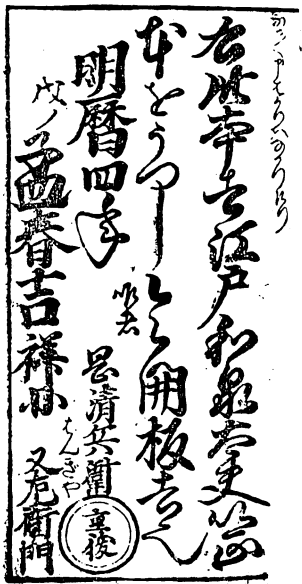
首巻「切姫の治宇」

て物覚えよく太平記、盛衰記、東鑑などをそらに覚え、儒釋歌道を少しづつは試みければ、故事來歴を引く事得ものなりとかや、此清兵衛近頃病死したると聞きて哀にも惜しく思ひければ、

金平を作り岡清病死して

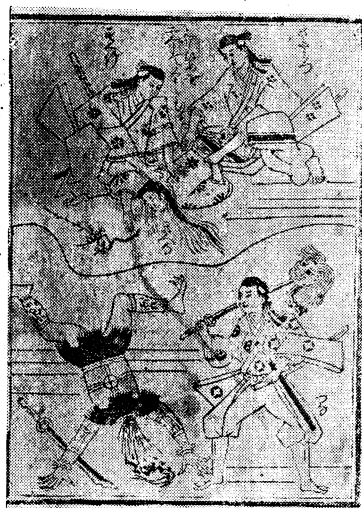
をしや思へば學もたけつな

即ちこの『故郷歸江戸咄』によれば、清兵衛は天性才發な人物で、『太平記』、『源平盛衰記』、『東鑑』等のやうな軍記物を暗記して居り、且、儒釋歌道の心得もあつた人物で當代の劇作者としては傑出した人物であつたと考へられる。而して和泉太夫の金平淨瑠璃の正本は大抵彼の手に成つたやうに傳へられるが、現存の正本について



尾巻「切姫の治宇」

見れば清兵衛在銘のものは、明暦四年刊行の『宇治の姫切』といふ和泉太夫の正本を始めとして、寛文十年の刊行本に三四種を見るだけである。しかも『宇治の姫切』は純然たる金平物ではなくて四天王を中心にした作である。加之、この時代の淨瑠璃作者としては、清兵衛以外の人物もあつた。例へば『箱根山合戦』(萬治三年刊)は小



宇治の姫切挿畫

島佐兵次の作であり、外題不明の金平本に四野宮彌四郎の作があり、『日本兩武將始』(貞享頃か)は岡五郎兵衛の作であるといふやうな證據もあるので、當時の金平本が清兵衛一人の作でない事は明かである。併し清兵衛は是等の作者の中では特に傑出した作者であつたので、世に喧傳されたものではなからうか。また作者を記していない正本に、彼の筆になつたものもあつたかも知れないといふ疑も、當然起る餘地はあるが、今日の文献では尙これを立證し得ない。清兵衛は既に明暦時代から作者として立ち、寛文頃を中心として活動したものと考へられる。而して貞享四年七月死んだといふ説もあるが(名人忌辰録)、『故郷歸江戸咄』の記事も亦ほぼ其の頃世を去つた

事を暗示して居る。

斯くの如く和泉太夫丹波少掾の公平淨瑠璃は、決して岡清兵衛一人の作とは言ひ得ないが、その正本として現存するものは左の通りである。

宇治の姫切 江戸和泉太夫正本
作者岡清兵衛

明暦四年孟春刊

、頼光勇力譚 江戸和泉太夫正本

萬治三年六月（鱗形屋）

公平北國責 同

寛文二年七月

金平天狗問答 江戸和泉太夫正本

寛文初

菅原親王（金平脈論）

寛文初

金平太平記 和泉太夫正本

金平黒熊 和泉太夫正本
作者岡清兵衛

金平化粧問答 和泉太夫正本

（金平關所破り） 丹波少掾正本

曲馬論 同

日本王代記 丹波少掾正本
作者岡清兵衛

(外題 不明)

(註二) 岡清兵衛作

(外題 不明)

愛宕 本地

公平 誕生記

丹波少掾正本

公平 劍の立花

尙この外に『聲曲類纂』には、

金平 法問諍

金平 兜論

金平 千人切

金平 大酒論

金平 最期

鎌倉管領結城合戦

采女 正平庭訓

などでも彼の正本として擧げてゐる。
(註二)

〔編者註一〕 外題のないのは、著者が見た、岡清兵衛作逸題の二本のやうである。尙『金平關所破り』も假題らしい。

〔編者註二〕 水谷不倒氏の『新修繪入淨瑠璃史』及び若月保治氏『古瑠璃の新研究、慶長・寛文篇』に掲げられてゐる

和泉太夫乃至櫻井丹波少掾の正本と、本書のそれとの間には、それぞれ若干の出入があるが、本書に擧げてゐない

ものを、左に録しておく。

王^四天武者執行

和泉太夫(推定)

萬治二年七月 通油町

大石山丸

江戸和泉太夫

萬治三年 八文字屋八左衛門

御館權太郎清平

和泉太夫(推定)

明曆頃

渡邊岩石割

同

萬治二年頃

四天王關破^リ*

天下一丹波少掾
平正信正本

寛文五六年

景政雷問答

同

同右

日本大王

同

寛文七八年

京今宮御本地

同

天和頃

王^四天女大力手捕軍

同

同右

公平武者執行

同 (推定)

貞享二年

公平山伏問答

天下一丹波少掾

年代不明

坂田金平論

同

年代不明

(以上水谷氏) *『金平關所破^リ』と同一か

咸陽宮

和泉太夫

明歴三年五月

公平生捕問答

丹

波掾
岡清兵衛

寛文三年五月

頼光跡目論

同

寛文七年

高^ろねぢ

同

寛文八年頃

第三章 古淨瑠璃全盛時代

田 村 將 軍 丹 波 掾 寛文十二年六月

(以上若月氏)

丹波少掾の藝歴は明かでないが、寛文年間を全盛期としたものと思はれる。『關東血氣物語』によれば丹波の子長太夫が、某屋敷の小姓と口論の末刃傷に及びし場へ、丹波は薙刀を携へて躍り込み、相手を悉く斬り、町人の人々の執成しで、長太夫と小姓等との相討ちといふことで事件は落着いたやうに記してあるが、また他の所説によれば、長太夫は法によつて刑せられ、親の丹波も芝居興行は出来なくなつたと傳へられて居る。兎に角、彼等親子が金平を生地で行つたやうな勇敢な行が、その藝の上に禍したことは争へずして、これによつて衰へるに至つたことだけは疑ないやうである。尤も、金平節の衰へたのは單にこの偶發的事件のみではなく、かういふ曲風、かういふ内容が次第に飽きられた事も、その内的原因であることは言ふまでもない。

〔異 説〕

『煙霞綺談』卷二(遠州の人西村白鳥著、明和七年の自序、安永二年刊)に「遠江の國海邊植松村といふ處にて、丹後といふ淨瑠璃太夫、聊かの意恨ありて十郎左衛門といふものを抜打に、腰のつかひを拂ひければ、太刀影に驚き逃げ走る、其間

三丁ばかり、少しき溝を飛ぶ時に二つに成つて死す、丹後其後安樂寺といふ淨土宗の和尚を請待し、十念を授かり心靜に切腹す、……其頃は天和三亥八月の事なり」と見えてゐるが、これは杉山丹後とは思はれず、或は丹波の上記の一件の誤傳か、尙後考を俟つ。

尙又、『役者繪づくし』下卷の淨瑠璃惣太夫の畫面の和泉太夫・長太夫の二人を掲げてあるが、この畫面の十人の太夫が、この時の健在の著名の太夫を畫いたものとすれば、二人共に貞享頃には藝壇に重きをなして居たものと思はれ、自然上記の事件はその後の事と見ねばならぬやうになるが、この邊のことについても疑はしい點があつて、尙研究の餘地があると思はれる。

二 二代目薩摩太夫

淨雲の系統では、金平節の開祖丹波少掾が最も名高いが、その外では淨雲の子二代目薩摩次郎右衛門は天下一薩摩太夫藤原直政と稱へて父淨雲の流風を傳へたといはれるが、その物語としては、

箱根山合戦

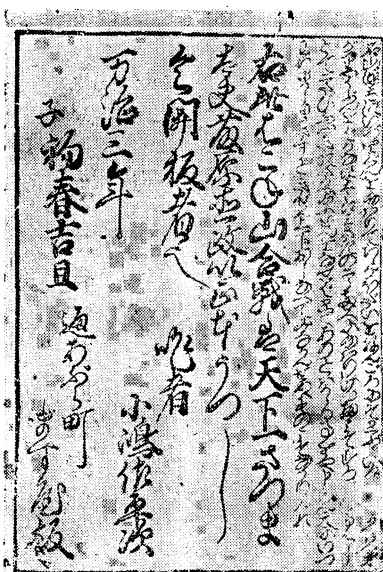
天下一薩摩太夫藤原直政
作者小島左平次

萬治三年正月

酒吞童子若壯

わかざかり
江戸薩摩太夫

萬治三年八月



箱 根 山 合 戰 卷 尾

秀平三代記 天下一薩摩太夫 萬治三年刊
の諸篇が現存する。

而してこの門から出たのが土佐少掾橘正勝と薩摩外記直政とで、前者は土佐節、後者は外記節の開祖となつた。

三 土佐少掾——土佐節

土佐少掾は初め内匠虎之助と稱へて、『酒顚童子』『風流和田酒盛』などのやうな金平式の武勇物を語つたが、後には『三世二河白道』『末廣昌源氏』の如き、高尾や八百屋お七などを取入れた世話物風の淨瑠璃を語るやうになり、一流を樹てて受領し、土佐少掾橘正勝と稱へて堺町に操芝居を興行し、延寶頃を盛時として世に持囃された。その子内匠源太夫がのち二代目土佐少掾となり、元祿から寶永頃まで行はれた。その正本としては前に擧げた外に『一心二河白道』(延寶二年)、『名古屋山三郎』、『新道成寺』、『定家』、『融』等を始めとして今日約五十篇近い書目が傳はつて居り、その中には繪入細字本もある。

るが、その大部分は寶永五年秋、小傳馬町の木下甚右衛門の開版にかかる八行大字本であつて、これは土佐節淨瑠璃の結集とも見られる。又この外に、同じ書店から同じ頃出た同流の段物集に『色竹蘭曲集』と『蘭曲後撰集』とがあり、前者は七十六段、後者は六十段の段物を收めてある。土佐節の曲風については、「俗を離れ風を立て、聲は梁の塵をたゝしめ、節は利休の茶杓よりもしほらしく、都鄙なべて風をなす」と木下版の序文にあるのによつてほぼ推測されるが、金平とは反對に上品でしとやかなのを特色としたもののやうで、金平に飽きた時代には相當受けがたらしいが、刺戟に乏しく、平板に墮し易かつたので、これが程なく衰滅に及んだ原因であつたらしい。そのことは現存の詞章を見ても分ること、その作品はいづれも文に光彩も波瀾も潤ひもなく、平板無味のものが多い。で、前記の木下版が出た頃には既に衰運に向つたので、ここにその作品を結集して再興しようとの意味で出版されたものと思ふが、既に時代は去つて人氣は後に述べる半太夫から河東へと移る事となつた。

土佐掾の門から出た手品市左衛門は手品節を語り出し、廣瀬式部太夫は式部節を語り出して（一に外記の門ともいふ）、貞享から元祿の頃に行はれた。大した勢力とはならなかつたが、兩派の典雅な曲風は、後に河東節に影響を及ぼし、元祖河東はその曲節を慕つて、その節付にこの

兩派の節を取入れたといはれる（摩曲類纂）。

四 薩摩外記——外記節

次に外記節の祖薩摩外記直政は、元祿・寶永頃の名手で操座で興行した以外に、歌舞伎へも出勤して淨瑠璃を語り、淨瑠璃と歌舞伎とを提携させる上に功があつた。外記の正本としては、

鑑本尊女鉢 薩摩外記直政
同小源太夫 元祿六年正月刊 正本

東山三幅對 正徳四年仲秋

出世太平記 正徳四年仲秋

など、元祿から正徳頃の刊行のものがある。

〔註〕 外記出勤歌舞伎の主なるものは次の通りである。

源平雷傳記	薩摩掾外記	ワキ同左平太	元祿十一年九月	中村座
景政雷問答	薩摩掾外記	ワキ左平太	十三年正月	森田座
和國五翠殿	"	"	"	三月
成田山分身不動	"	"	"	十六年四月
小栗十二段	"	"	"	七月

外記の門から出た大薩摩主膳太夫は、豪壯な曲風を得意として大薩摩節を開き、江戸の劇場音楽として用ゐられたが、それは享保に入つてからのことである。

而して外記節それ自身は享保頃には既に絶えて、その中の『住吉踊』と『傀儡師』との二曲が、河東節によつて今日まで辛うじて語り傳へられてゐる。この曲風は天保期の長唄の名手十代目六左衛門によつて長唄に取入れられて、所謂外記の三部曲といはれる『石橋』、『猿』、『傀儡師』が作曲され、これは長唄中でも名曲として今も尙行はれてゐる。

五 虎屋永閑——永閑節

尙、淨雲の系統として擧げて置き度いのは永閑節の祖虎屋永閑である。永閑は虎屋源太夫の門人で、貞享・元祿の頃行はれた（聲曲類纂）と傳へられてゐたが、寛文十一年刊行の永閑の正本に『仙人龍王威勢諍』といふのがあるのを以て見れば、既に寛文に名を成した太夫であつた事は明かである。そのワキ語りを虎屋小源太夫といひ、延寶頃に木挽町で操芝居を興行し、また歌舞伎へも出勤した。その正本に、

四天王やはぎ合戦

虎屋小源太夫正本

鹽谷小次郎夜討對決 同

がある。後者は赤穂義士復讐の原作といはれる、近松の『基盤太平記』にヒントを與へたらし
く思はれる作柄で、敵討物としては注目すべき作である。

〔註〕 小源太夫出勤歌舞伎の主なるものは次の通りである。

薄雪 今中將姫	虎屋 喜	元 元祿十三年三月	山村座
傾城 三鱗形	虎屋 喜	元 元祿十四年正月	"
頼政 萬年曆	虎屋源太夫、虎屋喜	元 元祿十三年?	"
	元、豐島小源太夫		

以上述べた薩摩淨雲の流派を以て、江戸に於ける淨瑠璃の硬派を代表するものとするれば、淨雲と共に寛永期に榮えた杉山丹後の系統は軟派に屬するものと言へよう。丹後の曲風の特徴については既に述べて置いたが、その系統を引いたものとしては、丹後の子江戸肥前掾を始めとして、その門下には近江大掾語齋と長門掾とがあつた。

六 肥前掾——肥前節

そのうち江戸肥前掾は堺町に操芝居を興行し、寛文の頃一派を語り出して肥前節といつて世

に行はれた。正本の現存するものとしては、

十 界 圖 天下一 肥前正本 寛文十二年五月

を見るのみであるが、その他にも澤山あつたものと推想される。その子半之亟が二代目肥前となり、その門下から江戸半太夫が出て半太夫節を語り出し、半太夫を師として江戸河東が大江戸淨瑠璃の粹といはれた河東節を語り出し、ここに江戸の軟派の淨瑠璃としては、その技巧の極致に達する事となるのであつて、これは享保に入つてのことである。

七 近江大掾語齋——語齋節（近江節）

次に語齋は語齋節一名近江節の始祖で、通稱を岡島吉左衛門といひ、吉原京町二丁目に住して甚之亟といふ三絃の名手について杉山丹後の淨瑠璃を語つてゐたが、その頃流行の四郎與吉の節を折衷して一派を語り出し、明暦年間に受領して近江大掾と稱し、のち薙髪して語齋と號した。寛文六年堺町で土人形の芝居を興行したとの説もあるが、後には無座の太夫で吉原京町に住んだ（洞房語園）。語齋節は劇場用としてよりは、座敷向き遊里趣味のものであつたらしい。殊に吉原に住んで居た關係もあつた爲か、寛文・延寶の頃吉原の遊女に之をよくする者があつた

といふ。正本としては、『源氏の由來』一名『六孫王經元』（萬治二年三月通油町吉田屋板、江戸近江太夫正本）が傳つてゐる。六孫王經元の子多田滿仲の臣坂田金末（金時の父）が、信濃の住人望月左近の讒によつて冤罪を蒙つたこと、滿仲が戸隱山の惡鬼を退治すること等を仕組んだもので、いづれかといへば武勇物であつて、この正本から見れば遊里には向きさうもないやうに思はれるが、これは恐らくは人形座で語られたものであつた爲だらう。

八 長 門 掾

長門掾は淨雲の弟子との説もあるが（菊岡沾涼の『近代世事談』に四天王の一人として長門太夫をあぐ）、『江戸節根元集』には丹後掾の弟子とある。今この説に従ふ。（註）明暦二年に受領して長門掾藤原爲英と名のつた（『鰐房卿記』明暦二丙申年十月十日藤原爲英任長門掾）。その正本としては、

ふ き あ げ 安 宅 高 館

の二篇が傳はつて居る。

〔編者註〕 雄山閣刊行風俗史講座に、著者が書きおろした『淨瑠璃史要』には、この點が全然反對で、長門掾を淨雲門下としてある。『史要』よりは、本書の底本の方が後に書かれてゐるので、本書の所説を以て最後のものとすべきかも知れない。

しれないが、それにつき遺憾ながら積極的な考證がない。今、参考として、『史要』からそのくぐりを抄出しておく。

長門掾は『江戸節根元集』には杉山丹後掾の弟子とあるが、同書はその性質上、丹後の樂系に立つ江戸節をやゝ過重する傾があるから、これにのみ依るは危険である。明歴四年刊行の長門掾の正本『身替問答』の巻頭に「天下一長門掾藤原爲英、江戸大さつま若太夫正本」とあるのは注目すべきである。こゝに大さつま若太夫とあるのは、前に述べた淨雲の子で、二代目の薩摩太夫となつた人と思ふが、この人と連名で正本を刊行して居るのによれば、淨雲の門下と見る方がよいと思ふ。

因に、水谷不倒氏の『新修繪人淨瑠璃史』は、右と同じ意見である。

九 その他の諸流



(江戸名所記所載) 天満太夫ざつま木戸前

その他この期間に系統不明の淨瑠璃太夫で堺町に操芝居を興行したものに、筑後掾（正本、『熱田大明神御本地』）、伊勢大掾などがあり、また説經には天滿八太夫・佐渡七太夫・結城孫四郎などがあつて、いづれも人形芝居を所有して興行し、非常な盛況を呈して居つた。その中でも天滿八太夫は名人として知られ、寛文末に受領して天下一石見掾藤原重信と稱へ、堺町に座を持ち、大薩摩と軒を並べて居り、延寶・天和頃を盛りとした。その門弟武藏權太夫は元祿年代に於ける名手で、時には歌舞伎芝居へも出勤したこともあつた。石見掾の正本としては、

兵庫の築島

石山記（延寶頃か）

あいごの若

阿彌陀胸割

ぼんてん國

崙山上人由來

鎌田政清

等がある。天滿八太夫の語り出した天滿節は、萬治より寶永頃までは行はれたが、その後は廢つて、

いたはしや浮世のすみに天滿節

といふ冠付が、『風俗陀羅尼』

（寶曆十年刻）
（尺龍撰）

に甲州長澤某の句として載せられるやうになつた。